

Best Rugby

7. Best Rugby tackle 2

Running handling game ラグビーのプレーの原型は「ボールを持って走りボールを手渡したりパスしたり時には足で行うパスと言うべきキックをすること」と「ボールを持って走る相手を捕えて止めるタックル」の二つです。タックルは、seize and stop プレーヤーの前進を止めることですがプレーヤーに持っているボールを handling されてはボールの展開を止めることが完成しませんので捕えて倒して止めるという意図が付加されるようになりました。視点を変えて対比してみますとラグビーは相手の身体や腕を回して捕えるタックルではなく tag に触れることで同じ働きを完成させるようにしたものです。走っているプレーヤーの激しく動いている脚を捕まえるという痛さや怖さや危険がなく tag に触れられたプレーヤーもボール放すだけでよいのですから簡単です。しかもボールはスムーズに展開されていくのですから面白さはいっぱいです。勿論、タックルの有無によるゲームの面白さは別のものでプレーヤーが何をどこに求めるかによって選択肢が決まるのです。そこでタックルの identity について復習し考察を深めましょう。(注：西川ラグビーコラム参照)

正しいタックルの方法については先に述べた通りですがタックルの高さについていくつか異論があり悩んでいるプレーヤーがいます。ルール上高いタックルは危険なタックルであり低い程よいタックルであるという考えが広まりそれをまともに受けて怖さもあり考えこんでしまっているプレーヤーがいます。タックルは低ければよいというものではないというところから話を始めましょう。

既述のコラム (http://park21.wakwak.com/~nishikawa_colum/column/PDF/20120109.pdf) のポスターにもありますように高さは大腿部であることが基本的要点です。少し高くなっても腰の少し上位が適当で少し低くなっても膝の少し上位というのが目安です。最近高いタックルをよく見かけるようになりました。危険ですからいけません。胸から上であつたり、stiff arm tackle 腕を固くし巻きつけるようなタックルは禁止されています。一方できるだけ低くということで足首の辺りを掴めば確実に倒せると考えるのは短絡的です。走っているプレーヤーの両脚が揃うのは瞬間で前の脚に盾を当て後の脚が前に出てきた時に両脚を腕で抱え込んでしまうというのは不可能でありませんがうまくいくというものではありません。そのような低い頭や肩の位置では上から押さえつけるようなハンドオフで簡単に抜かれますし、走者がスピードを一旦落として止まるようにすれば脚をつかまれるまで自由にパスができますのでタックルの効用は殆ど無しということになります。Dodge 両足の着地点に巾をもたせて相手を迷わせるドッジングという走り方もあります。最近プレーヤーが power 一辺倒走り方を色々工夫しませんからタックルを短絡的な考えが広がる傾向にあります。ずっと以前は腰から上のタックルは否定されていました。ハンドオフで簡単に不成立されてしまうことが多かったからです。最近このような場合のハンドオフを見ることが少なくなりました。高いタックルはボールを殺すために有効だと考えることが原因です。タックルにしようとした相手の顔にハンドオフしたプレーヤーが非難されることがありました。これは非難する方が間違いで手の掌を開いておれば正当なハンドオフです。ラグビーの楽しさの一つに走り方の工夫と実行があります。攻め方の原理は「余し」と「交わし」に集約されます。どう「余し」どう「交わす」かです。今日ではそれらは「当り」を加えて優先順位の第一位にしています。これはフィットネスの研究が進み身体的能力が向上したことが内的な原因ですが、外的には 1960 年代からグローバル化とプロ化が進んだ結果でありリーグラグビーの影響を受けて激しいぶつかり合いが観衆に歓迎され高い評価を受ける傾向に影響しています。ラグビーは格別の体格をもちフィットネスを十分した人たちだけのスポーツではありません。「3K スポーツ」と敬遠することなくもっと多くの人にラグビーを楽しんでほしいです。